

が四国遍路の世界遺産化である。二〇〇〇年前後に端を発し、二〇〇六年には四国四県が共同して「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産暫定リスト入りを目指したが、現在は候補に留まっている。こうした状況を踏まえつつ、ひとまず世界遺産登録がなされる以前の現時点において、筆者が最近の調査で接する機会を得た資料をもとに、外国人遍路の動向を大掴みに理解することで、四国遍路のグローバル化の一端を垣間見ようというのが本発表の主眼である。

本発表で用いたのは、阿波最後の札所である二十三番薬王寺の隣町で接待活動を行う「牟岐町お接待の会」が、同会の提供する接待所の訪問者を記録した「訪問台帳」である。二〇〇一年三月から二〇一一年五月までの記録から、住所と氏名を手がかりに外国人遍路と思われる記録二四四件を抽出し、分析を試みた。

この結果、明らかになったのは次の四点である。

- (1) 海外から来る遍路は、アジア(特に中国)が少なく、欧州・北米が圧倒的に多い。一般的な訪日観光客の動向とはかなり異なる特徴を持つ。
- (2) 外国人遍路は二〇〇〇年代を通して増加し、二〇〇八～二〇〇九年のピーク時には二〇〇一年の約八倍になったが、二〇一〇～二〇一一年は減少傾向にある。
- (3) 外国人遍路は若年層が厚い。遍路全体では六〇代が四割を占めるのに対して、外国人遍路は二〇代が三四%と最も多く、二〇代と四〇代で六割を超える。
- (4) 歩き遍路の全体的な傾向をみると、二〇〇七年以降は巡

礼者数が減少に転じ、とりわけ二〇一〇年以降は、ピーク時の約半分という急激な落ち込みとなっている。

中国などのアジア系の遍路が少ない理由はいくつか考えられるが、ひとつの仮説として、キリスト教文化圏におけるサンテリアゴの存在など、「巡礼」に対する認知度や親近感が影響するのではないかという視点をあげておきたい。その意味では、四国遍路は「特殊」な観光資源といえるのかもしれない。また(4)のような歩き遍路の減少を示すデータはこれまで指摘されていなかったが、本資料の分析からは、平成期を通じてブームとされてきた歩き遍路がある種の転機を迎えた可能性が示唆されたことを指摘しておきたい。

巡礼者の定義をめぐる差異の所在

——イード&サルノウ後の展開——

土井 清美

巡礼という習俗の全体像を捉えようとした巡礼研究は、巡礼という材料を用いて宗教観やアクチュアルな社会関係を捉える方向へと脱中心化している。そのようななか、本発表は旅する人々巡礼者に関する議論に焦点を合わせ、研究対象となる「巡礼者」の差異がどこにあるのかを考える。

まず、コミュニケーションと対立言説という巡礼論の二大パラダイムにある類似性と課題、それを乗り越えるべく登場した運動(movement)アプローチの特徴などを整理する。そして近年

の巡礼研究が、かつてあったような定義や概念の精緻化ではなく、特定の地へ向かう多彩な旅人のあいだにある類似性、場所の異種混雑性、諸組織宗教の再編成といった枠組みをゆるめる議論へと向かっていることを指摘する。

しかしそれでもなお、文献調査ではなくフィールドワークをする研究者には次のような問われるべき課題が残されている。調査者は、他の巡礼者とは違って何ものにも影響を受けず冷徹に人や巡礼地を対象化できるのだろうか。組織宗教を実践しない人やグローバルに移動する人が多くいる現在にあって、調査者は「動じずに」宗教に付随するわからなさや他者性を分析する特権的な立場にあるのだろうか。

理性や意志——という次元が仮にあるとして——を駆使して、対象と自己を切断することにより分析できる社会的諸側面は確かにあるかもしれない。しかしフィールドワークする調査者は、ほかの巡礼者と同じ天候のもとでその土地の食事を摂り、音を聞き、ニオイを嗅ぐ。自覚的でないところで全身体的に影響を受けているはずである。巡礼者の言動を観察する調査者の足元は、十分に揺らいでいる。

このような考えのもと本発表では、科学技術社会論、文化人類学的芸術研究、ランドスケープ論などで近年注目されつつある視角を紹介したい。この視角(本発表ではドゥルーズ的—文化人類学的アプローチとよぶこととする)の特徴は、人間の観察能力の疑わしさや、自身と調査対象者の認識を混同する危険などを積極的な補助線とする点にある。このことにより、状況に埋め込まれたものではなく具体的に現れるものを捉えたり、

特定の集団を対象化するのではなく類似した行為をする人間の目から見える世界(cosmos)を捉えるなど、視点の変更が可能になる。それは、現在の状況に至った背景よりも、何かを形成していく力を捉えようとする試みにほかならない。

このアプローチから想を得つつ、そこに芸術や哲学などで用いられる遠近法(perspectivism, *perspectiva*)の考え方を挿入することにより、次のような指摘ができる。一、人の差異は社会的に内在するのではなく、具体的なものの見え方に由来する。二、「我々」と「他者」を画する認識は身体感覚と乖離している。三、「差異」は移動の過程——視点の移動——に伴って常に更新される。

発表では、理論的な視角について論じる。具体的な事例研究については、次の論文等を参照されたい(Kiyomi Doi, "Onto Emerging Ground: Anticlimactic Movement on the Camino de Santiago de Compostela," *Tourism: An International and Interdisciplinary Journal*, Vol. 59, No. 3, October 2011)。また、巡礼研究の動向を論じた最新の著作としては、次の文献が参考になると思われる(John Eade, "Introduction for Pilgrimage: Communitas and Contestation," *Tourism: An International and Interdisciplinary Journal*, Vol. 59, No. 3, October 2011)。